様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１７２９６

研究課題名（和文）一時帰郷としてのルーツ観光体験が移民子孫の心理に及ぼす影響

研究課題名（英文）The Psychological Influence of Root-Tourism as a Temporary Homecoming for Descendants of Immigrants

研究代表者
前村　奈央佳（MAEMURA, Naoka）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：５０６３２２３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、移民が自身の民族的なルーツとなる土地を一時的に訪問する「ルーツ観光」に焦点をあて、ルーツ観光体験が移民のアイデンティティや祖国のイメージに及ぼす影響を検討することであった。2016年10月に沖縄県で開催された「第6回世界のウチナーンチュ大会」と前後の期間にて量的調査(質問紙調査)と質的調査(面接調査)を実施した。調査の結果、アイデンティティの変容には3種のパターンがみられた。また、移民１世は沖縄にホスト国よりも強く同一化するのに対し、ホスト国の文化に馴染んだ移民子孫世代にとって沖縄は、「大好きな旅行先」として客体化され、ルーツ地でいわば異文化体験をする実態が浮き彫りとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ルーツ観光は、移民子孫世代のエスニック・アイデンティティを刺激するだけでなく、ホストのアイデンティティにも影響することが確かめられた。また、複数のアイデンティティが統合された上で強化されるケースも確認され、日系移民のルーツ観光に関する研究事例を蓄積することができた。移民2世以降の世代による、民族的な「祖国」での＜異文化体験＞についてさらに検討を進めることにより、異文化間コミュニケーション研究の発展にも貢献できるだろう。今回フィールドとなった沖縄県には研究成果の一部について報告書を提出したが、研究成果を応用し、ルーツ観光を掲げた旅行商品の開発など、地域の経済発展への貢献も期待される。

研究成果の概要（英文）：“Root-tourism” is defined as a temporary visit by immigrants and their descendants to their place of ethnic origin. The purpose of the present research is to investigate the influence of such travel on individuals’ identity, and image of their ancestral country. The 6th Worldwide Uchinanchu Festival, held in Okinawa in 2016, was selected as the field of research. During the festival, questionnaires and interview surveys were conducted with Okinawan immigrants. Results showed that there were three patterns of identity shift; namely, 1) reinforcement of ethnic identity; 2) reinforcement of host identity; and 3) reinforcement of hybrid identity (i.e., connecting with both, or other, identities). For first generation immigrants, Okinawa was “home,” with which they identified more closely than their host country. For the second generation (and beyond), Okinawa was their favorite place to visit as tourists, and visits were often recognized as intercultural experiences.

研究分野：社会心理学

キーワード：移民　ルーツ観光　アイデンティティ　異文化適応　沖縄

１．研究開始当初の背景

本研究は、日本国内から海外へ移住した移民の子孫世代が、自身の民族的なルーツとなる土地を一時的に訪れる「ルーツ観光」に焦点をあてて実施された。

（1）社会背景

1990 年代の入管法改正以降、南米出身の在日日系人の増加に伴って、彼らの集住地域ではフィールド調査研究が行われるようになった。彼らは当初、いわゆる「出稼ぎ」を契機に来日し、そのまま定住して日本の地域社会で生活をしており、「ニューカマー」などと呼ばれている。このようなケースは、いわば移民の祖国への「帰還移住」と考えられ、わが国では増加傾向にある。とはいえ、国外へ移住した移民全体から見れば、帰還移住は一般的なものではなく、多くの移民はホスト国に定住している。こうして、ホスト国に定住し世代を重ねた移民の子孫が、祖国との直接的な接触を持つ機会の一つが、「ルーツ観光」である。本研究では、我が国で大々的に行われているルーツ観光のイベントとして、「世界のウチナーンチュ大会」という沖縄系移民の「郷(さと)帰り」を謳った祭典を取り上げた。

（2）学術的背景

心理学や社会心理学の領域における移民研究は、主にそのアイデンティティについて関心が向けられてきた。たとえば Berry(1997, 2013 など)の文化受容モデルから移民のアイデンティティを捉えると、祖国(エスニック)に関するアイデンティティと、ホスト国に関するアイデンティティのいずれが優勢か、バランスが取れた状態か、そのどちらでもないのか、といった分類が可能である。また、エスニック・アイデンティティに関して、それは固定的なものではなく、生涯を通じて変容する過程であるとする見方もある(辻本, 1998)。では、ルーツ観光が移民のアイデンティティを変容させるかについて先行研究の見解は様々で、エスニック・アイデンティティが強まりホスト国アイデンティティが弱まるといったものがあれば(Schimmer, 2014)、反対にホスト国アイデンティティが強まりエスニック・アイデンティティが弱まるといったものもある(丸山, 2012)。在日・海外在住いずれにおいても、心理学や社会心理学に基づく観点から日系移民を対象とし調査・分析を行った研究は少なく、こと日系移民のルーツ観光に関しては殆ど研究がなされていない。

２．研究の目的

上述のように、わが国で日系移民を対象とした研究や、ルーツ観光についての心理学的研究が少ないことから、本研究の第一の目的は、わが国におけるルーツ観光の事例蓄積であった。より具体的な目的として、第二に、ルーツ観光体験が移民(1 世ではなく、特に 2 世以降の子孫世代)の心理＜アイデンティティ、ルーツ地(祖国)イメージ、価値観など＞に及ぼす影響を検討することであった。いずれも探索的な段階であるため、量的な調査により全体的傾向を把握した上で、移民個人への詳細な聞き取りを経た質的な検討を行うこととした。また、世界に拡散した同系の移民(子孫も含む)に対し、同一の項目についてデータを得られる貴重な機会であること、本研究で調査対象とする移民の心理的特性(世界に拡散する同系の移民の共通点・相違点など)を把握することも重要であると考えられたことから、特に移民の価値観について地域間・世代間比較も試みた。

３．研究の方法

本研究では、わが国におけるルーツ観光の事例として、2016 年 10 月に沖縄県で開催された「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」を主な調査フィールドとした。同大会は、19～20 世紀にかけて世界各地へ移住した沖縄県系の移民・その子孫同士や、現在の沖縄県民とのネットワーク作り、沖縄文化・アイデンティティの次世代継承を目的として 1990 年より 5 年に 1 度開催されている祭典である。分析に使用したデータは、同大会を契機に来沖した沖縄系移民に対して、大会期間中と、その前後に次のような手順で収集された。

(1)量的調査

質問紙調査(回答時の状況や調査協力者の意向に応じて、印刷された調査票・タブレットのいずれかの形式)を行った。調査票は過去の大会参加者の出身国統計を目安に、日本語・英語・スペイン語・ポルトガル語の 4 言語で作成した。日本語版を初めに作成し、他言語に翻訳する形をとった。「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」会場及びその周辺に大学生・大学院生からなる調査員を 2 名ひと組で配置し、大会参加者(海外からの参加者・県外からの参加者・県内からの参加者)に声をかけ、承諾が得られた人が回答者となった。調査の御礼として、終了後に粗品が手渡された。

調査項目は、①参加者の属性について(性別、年齢、国籍、職業、学歴、社会階層意識、生活満足度、沖縄系か否か、移民世代、居住地、県人会への所属と活動頻度、大会参加回数など)、②大会に関する項目(参加目的、大会満足度、次回参加意図、大会参加に要した費用など)、③沖縄/居住地についての意識(アイデンティティ、沖縄の伝統・文化実践、「ウチナーンチュ」の条件、大会を通じたネットワーク、沖縄に関する情報接触、言語能力、価値観など)であった。このうち、「①参加者の属性」以外の項目については、本研究では特に「②大会に関する項目」の「参加目的」、「③沖縄/居住地についての意識項目」の「アイデンティティ」(「〇〇人だ」と思う程度に

ついて「1.まったくそう思わない」～「4.非常にそう思う」の 4 件法で測定)、「価値観」(「不確実性の回避」「父親権威」「内集団思考」「集団思考」「性別役割分業観」「権力格差」「リスクテーキング」に関する項目について「1.強く反対」～「5.強く賛成」の 5 段階で評定)を中心に分析を行った。

(2) 質的調査

「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」会場及びその周辺にて、海外からの大会参加者に声をかけ、インタビューへの協力を要請した。調査協力の承諾が得られた参加者に対して、その場で調査員が参加者一名につき 10 分～20 分程度の聞き取り(半構造化面接)を行った。調査員として、事前に研修を受けた大学生 40 名が参加した。調査員は 2 名ひと組 となり、大会開催期間中の 3 日間に交代で調査にあたった。調査は、日本語ないし英語で行われ 、調査協力者に承諾を得た上で IC レコーダーに録音された。調査終了後には、協力への御礼として文具を調査員から参加者に手渡した。

上の協力者以外に、一部の参加者に対してより時間をかけて詳細なインタビューを実施することとした。協力者は、沖縄県の大会担当部署職員に沖縄系移民子孫の知人数名を事前に紹介してもらい、スノーボール形式で募ると同時に、大会会場で声をかけて協力依頼を行った。協力者にはインタビュー後に謝礼が手渡された。

調査項目は、参加者の属性(性別、年齢、移民世代、ホスト国、過去の訪沖経験)、沖縄/ホスト国イメージ、沖縄 - ホスト国の類似点・相違点への気づき、沖縄 - ホスト国の意味づけについて聞き取りを行った。また、一部の詳細なインタビューでは、最初に沖縄に来た動機や目的、アイデンティティの変化(沖縄/ホスト国/その他)について、参加者のライフストーリーとともにオープンな形式で聞き取った。

４．研究成果

(1) 量的検討(大会参加目的の集計、アイデンティティについて)

大会参加者 1,119 名から回答を得、うち有効回答数は 1,093 票であった。そのうち、海外参加者の度数は 381(34.9%)、県外参加者 35(1.8%)、県内参加者 677(61.9%)であり、海外参加者のうち、自身が沖縄系であると回答した「沖縄系移民」は 253(66.4%)であった。

●大会参加と「ルーツ観光」

海外参加者の大会参加目的(総数 987 件)を集計したところ、主な目的は「1.沖縄の伝統や文化を学ぶため」(15.7%)、「2.沖縄の親戚に会うため」(14.5%)、「3.自分のルーツを確認するため」(11.4%)、「4.世界のウチナーンチュと交流するため」(9.8%)、「5.沖縄県民と交流するため」(9.0%)、「6.友人・知人に会うため」(8.2%)であった。このうち、1～3 は本研究における「ルーツ観光」に関連すると考えられ(合計 41.6%)、「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」がルーツ観光のフィールドとして適していることが確かめられた。

●沖縄/居住地アイデンティティ(加藤ほか, 2018)

大会参加者のうち、自身が沖縄系移民だと回答した 220 名(1 世 N=30 ; 2 世 N=55; 3 世 N=71; 4 世～N=25)の沖縄アイデンティティと居住地(ホスト国)アイデンティティを世代ごとに比較した。年齢を統制した上で 2 要因(移民世代×アイデンティティ)の共分散分析(混合計画)を行った結果、移民世代×アイデンティティに有意な交互作用がみられた($F(3,176)=11.48$, $p<.001$, $\eta^2_p=.16$)。下位検定(Holm 法)の結果、移民 1 世で沖縄アイデンティティ・居住地アイデンティティに有意差がみられ($p<.001$)、沖縄アイデンティティが高かった。移民 2 世以降の世代では沖縄アイデンティティ・居住地アイデンティティの間に有意差はみられなかった。また、世代間で比較すると、居住地アイデンティティは 1 世が 2 世以降の世代よりも有意に低かった($p<.01$)。沖縄アイデンティティについては、有意な世代差はみられなかった(図 1 参照)。このことから、沖縄で生まれ海外に移住した世代である 1 世は、生まれ故郷である沖縄に対して、自らが選択して移住した現居住地より強いアイデンティティを持つことが明らかになった。一方、2 世以降の世代については、沖縄と居住地に対して同程度に同一化している傾向がみられた。このことは、2 世以降の世代で「沖縄系〇〇人」といった複合的なアイデンティティが形成されている可能性を示唆している。また、沖縄アイデンティティの素点は世代を経るごとに低下する傾向がみられるものの統計的には有意ではなく、いずれも中点を超えていることから、本大会参加者において沖縄アイデンティティが世代を超えて継承されていることを示している。大会参加前のデータがないため大会の効果は定かではないが、少なくとも全体的な傾向として、大会というルーツ観光体験が沖縄アイデンティティを低下させたとは考えにくい。

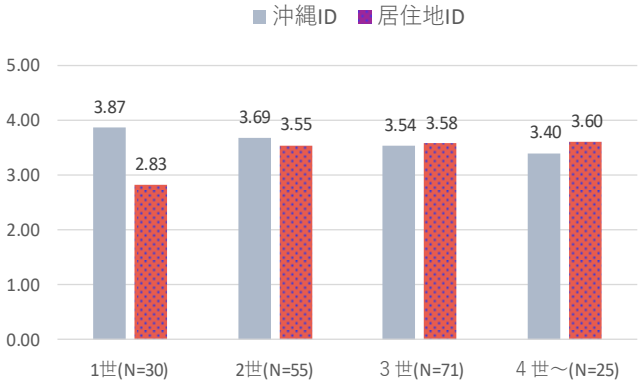

図 1. 沖縄県系人の移民世代別アイデンティティ

(2)-1 質的検討①

調査員を介した簡易なインタビューには、大会に参加中の沖縄系移民 80 名から協力を得た(男性 32 名・女性 48 名, 平均年齢＝54.33 歳(*SD*=18.77 歳))。協力者の出身国は、アメリカ合衆国 62 名、カナダ 6 名、ブラジル 4 名、ペルー4 名、その他 4 名であった。また、移民世代は、1 世 23 名(うち、女性 17 名)、2 世 21 名(10)、3 世 25 名(15)、4 世 11 名(6)であった。

●沖縄-ホスト国との相違点について

沖縄とホスト国との相違点について挙げられた総数は 105 件であった(複数回答あり)。近藤(1981) の「カルチュア・ショックの分類」を参考にしながら、言及のある観点(基準)に基づいて分類作業を行った。その結果、「1. 人の性質」「2. 文化(習慣・服装・食べ物など)」「3. 気候風土」「4. 都市機能(交通・街並み)」「5. 多様性(文化・人種)」「6. 平和・治安」「7. 歴史」の 7 種のカテゴリにまとめられた。さらに、各カテゴリの出現件数を移民世代別に集計したものを図 2 に示す。全体的傾向として、沖縄とホスト国との相違点については「1.人の性質」に関する回答が多く、次ぐ「2.文化」、「3.気候風土」、「4.都市機能」で全体の 9 割が占められた。これら 4 カテゴリについて、移民 1 世・2 世と 3 世・4 世の度数を比較したところ、全体的な差がある傾向がみられた($\chi^2(3)=6.95$, $p<.10$)。残差分析を行ったところ、「2.文化」への回答の割合は移民 1 世・2 世に比べて 3 世・4 世で高く($p<.05$)、反対に「3.気候風土」の回答割合は移民 1 世・2 世が 3 世・4 世に比べて高い傾向がみられた($p<.10$)。

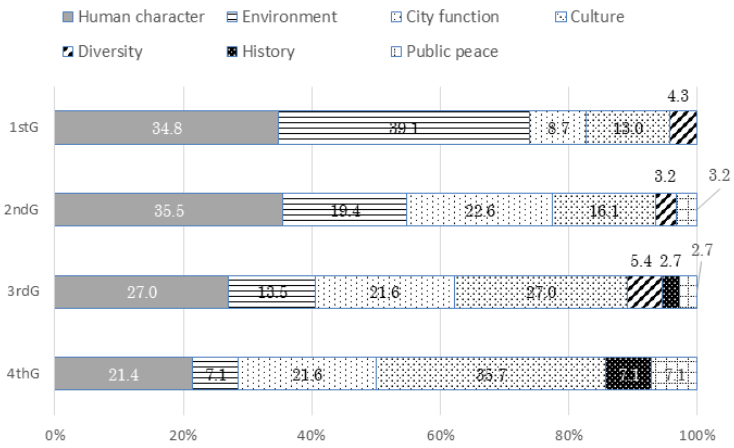

図 2. 沖縄―ホスト国の差異を捉える観点　世代別割合

●沖縄の意味づけ

「あなたにとっての沖縄」に対する回答は、「1. 故郷」「2. ルーツ」「3.私の誇り」「4. 大好きな場所」「5. 旅行先」の主な 5 種類に分類された。ほとんどの移民 1 世にとって沖縄が「1.祖国」と捉えられ、強い感情語とともに語られる傾向がみられた。移民 2 世以降になると、沖縄は「2.ルーツ」ではあるものの、「4.大好きな場所」「5.旅行先」と捉えられる傾向がみられた。

以上の結果より、移民世代が進むごとに、沖縄が「祖国」といった参加者自身の内面に強く同一化される存在から、「大好きな旅行先」として、ホスト国との文化的な差異に客観的に気づきそれを楽しむ対象に変化していく傾向がみられた。

(2)-2 質的検討②

北米、中南米出身の沖縄系移民 3 世・4 世の参加者 11 名(男性 4 名、女性 7 名；平均年齢 40.64 歳, *SD*=18.41)に対し一人 30 分～70 分の面接調査を行った(表 1 参照)。

表 1. 面接調査協力者の背景

ID	出身国	性別	年齢	移民世代	婚姻	滞在or訪問	渡沖回数
1	Brazil	F	27	3世	U	V	3
2	Brazil	M	31	3世	U	V	3-4
3	Brazil	F	20	4世	U	V	3
4	Brazil	F	28	3世	U	S (3年間)	4
5	Peru	F	40	3世	U	V	4
6	Peru	F	53	3世	M	V	1
7	Peru	M	27	4世	U	S (2年間)	1
8	Peru	F	25	3世	U	S (5年間)	1
9	USA (Hawaii)	F	58	3世	M	V	8
10	USA (Hawaii)	M	65	3世	M	V	3
11	USA (CA)	M	73	3世	U	V	1

●ルーツ観光によるルーツ地(沖縄)イメージの変化

訪沖前後の沖縄イメージには次の①～③にのように、いくつかパターンがみられた。

①＜前：パラダイス(テレビで見るような美しい観光地)＞➜＜後：ネガティブ(普通の都会、米軍基地に囲まれた悲しい場所)＞、

②＜前：過去のイメージ(発展していない場所)＞➜＜後：発展(発展している都市)＞

③＜前：情報なし(よく知らない、単に祖父母の出身国)＞➜＜後：ポジティブ(幸せで美しい場所、温かい人々)

ルーツ地を訪れたことのない 3 世以降の移民子孫にとっては、ルーツ地のイメージは祖父母からの伝聞情報に頼って形作られていることが多いため、「伝統的」「田舎っぽい」「夢のような」など、単純化され美化されやすいと考えられる。そのため、実際に訪れてみると理想と現実の差異を認識するケースが散見されると考えられる。

●ルーツ観光によるアイデンティティの変化

参加者自身のアイデンティティ(以下、ID)に関する語りの内容を質的に分類した結果、主に 3 種のパターンがみられた。先行研究を参考に＜1.エスニック ID 強化型＞＜2.ホスト ID 強化型＞＜3.ハイブリッド型＞と名付けた(図 3 参照)。ルーツ観光はエスニック ID を刺激するだけでなく、現在の居住国(ホスト)の ID にも影響することが確かめられた。また場合によっては、ルーツ観光によって、エスニック ID―ホスト ID がバランスよく合わさった「ハイブリッド型」の ID が強化されることも示唆された。ホスト ID が強化される要因の一つとして、挨拶の仕方や身体接触の度合い、仕草など、沖縄―ホスト国とのコミュニケーション様式の違いに焦点が向けられることが挙げられた。

エスニック ID 強化型 (例：25 歳女性、ペルー出身、3 世)

「…沖縄に来る前は、自分のルーツには全然興味がなかった。けど今は、沖縄系っていうことを誇りに思う。ペルー人ってことを誇りに思うのと同じように…」

ホスト ID 強化型 (例：27 歳女性、ブラジル出身、3 世)

「…沖縄に来ると、自分が＜ブラジル人＞なんだとより強く気づかされる。言葉、習慣、挨拶の仕方、食事、ブラジルと沖縄では違うので…」

ハイブリッド型 (例：27 歳男性、ペルー出身、4 世)

「…沖縄に来る前、＜オキナワ＞が自分に欠けている部分のような気がしていた。今は、オキナワ、日系、ペルー、全部が自分のアイデンティティになった…」

図 3. ルーツ観光後のアイデンティティのパターン

(3) その他の研究成果：沖縄県系人の価値観について(前村・加藤, 2018)

ここでは、同じ「沖縄系」とされる人々について、世界各地に移住した沖縄系移民の価値観を現在の沖縄県民と比較することで、文化移動に伴うエスニックな集団の価値観の保持や変容を検討した。分析対象としたのは、大会参加者のうち、沖縄県内出身者 548 名(*M*=40.91 歳, *SD*=19.21)、沖縄系の北米在住者 152 名<1 世：23 名(*M*=62.9 歳, *SD*=9.11), 2 世：35 名(*M*=45.61 歳, *SD*=18.93), 3 世：49 名(*M*=57.59 歳, *SD*=16.15), 4 世以降：21 名(*M*=39.68 歳, *SD*=16.10)>、沖縄系の中南米在住者 72 名<1 世：10 名(*M*=58.40 歳, *SD*=9.28), 2 世：26 名(*M*=55.38 歳, *SD*=16.33), 3 世：25 名(*M*=40.04 歳, *SD*=14.85), 4 世以降：4 名(*M*=25.00 歳, *SD*=5.10)>であった。

●地域(沖縄・北米・中南米)および移民世代による価値観比較

価値観項目「不確実性の回避」「父親権威」「集団思考」「性別役割分業観」「権力格差」「リスクテーキング」について、沖縄県民＜県内出身＞・北米移民 1 世・北米移民 2 世・北米移民 3 世～・中南米移民 1 世・中南米移民 2 世・中南米移民 3 世～の特徴や類似性を把握するため、多重応答分析を行った。価値観項目については、5 段階(「1.強く反対」～「5.強く賛成」)の回答を「賛成(4・5 点)」・「中立(3 点)」・「反対(1・2 点)」の 3 段階に変換し、ラベルづけ(たとえば、「不確実性の回避」は＜不確実性回避・中立・不確実性是認＞のようにラベルづけた)を行った。結果を図 4 に示す。固有値は第 1 次元が.31(寄与率 12.1%)、第 2 次元が.28(寄与率 10.7%)であった。第 1 次元は『県民―移民』の軸、第 2 次元は『世代』の軸であると解釈できる。

また 2 次元で得られた各カテゴリの座標軸の数値をもとにクラスター分析(Ward 法)を行ったところ、3 つのクラスターに分類された。デモグラフィック変数を中心にまとまると、「沖縄県民」クラスター、「北米・中南米 1 世、中南米 2 世」クラスター、「北米 2 世、北米・中南米 3 世～」クラスターとなった。このうち「沖縄県民」クラスターには、各価値観のすべての中立と「不確実性回避」、「リスク回避」が含まれた。「北米・中南米 1 世、中南米 2 世」クラスターには、「不確実性是認」「性別役割分業観」「権力格差是認」「父権的」「集団主義」「リスクテーキング」が含まれた。そして「北米 2 世、北米・中南米 3 世～」クラスターには、「権力平等主義」「男女平等主義」「非父権的」「個人主義」が含まれた。

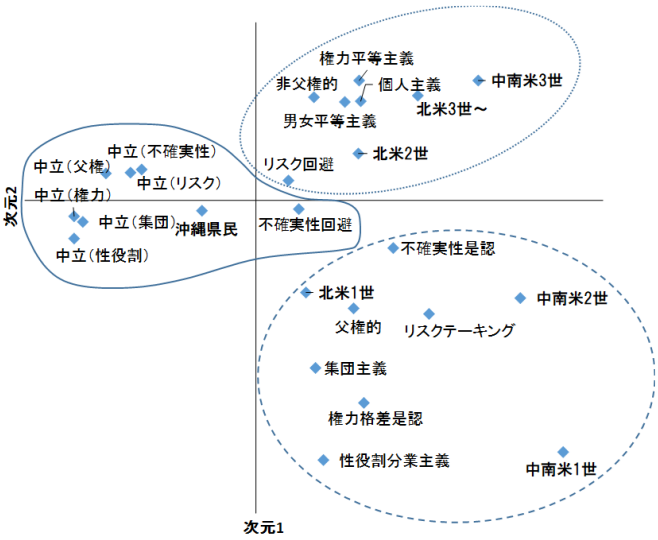

図 4. 多重応答分析による地域と移民世代・価値観の布置図

このように、沖縄県民は他の 2 地域よりも集団主義的で性別役割分業志向が強く、リスク回避的な傾向がみられた。日本人は集団主義傾向が強く、性別役割分業を重視する価値観を持つことが先行研究で示されてきたが、3 地域での比較の結果、沖縄県民が相対的にこの日本人的な特徴を保持している傾向を示すと考えらえる。一方、北米在住者は相対的に内集団重視の思考が低く、

男女平等主義的・権力平等主義的であった。この結果は、個人主義かつ権力平等主義的である北米の価値観と合致するものである。中南米在住者に関しては、相対的に父親の権威が強く、リスクテーキングで、不確実性に対しては回避的、集団思考が低いといった傾向がみられた。先行研究で中南米は権力格差の是認や伝統的価値観が高いとされているが、父親権威の高さなどは、この伝統的価値観の高さを反映するものと考えられる。

＜引用文献＞

Berry, J, W. (1997). Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, 46, 6-68.

Berry, J, W. (2013). Intercultural relations in plural societies: Research derived from multiculturalism policy. *Acta de Investigación Psiclógica*, 3(2), 1122-1135.

近藤裕(1981). カルチュア・ショックの心理：異文化とつきあうために. 創元社.

丸山奈穂(2012). 故郷を求めて：中国系アメリカ人のルーツ観光経験. 観光研究, 23(2), 13-18.

Schimmer, P. (2014). Transnationalism and ethnic identification among adolescent children of immigrants in the Netherlands, Germany, England, and Sweden. *International Migration Review*. 48 (3), 680-709.

辻本昌弘(1998). 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程.社会心理学研究,14(1),1-11.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 前村奈央佳・加藤潤三(2018).沖縄県系人の価値観に関する研究:北米・中南米・沖縄による地域間・世代間比較. 移民研究,14, 21-34.

② 加藤潤三・前村奈央佳・金城宏幸・野入直美・酒井アルベルト・山里絹子・グスターボ メイレレス・石原綾華(2018).沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討:「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて. 移民研究,14,1-20.

〔学会発表〕（計 7 件）

① 前村奈央佳・加藤潤三(2018) ルーツ観光が移民子孫のアイデンティティに及ぼす影響：沖縄系移民の第三・第四世代の語りを通して. 日本社会心理学会第 59 回大会.

② Maemura, N., & Kato, J. (2018). “Roots tourism” in Okinawa (2): Generational difference in emigrants’ views of their ancestral homeland. *2018 SIETAR Japan World Congress*.

③ 前村奈央佳・加藤潤三(2017). 沖縄県系人の価値観に関する研究：沖縄県民・北米在住沖縄系移民・中南米在住沖縄系移民の比較. 日本社会心理学会第 58 回大会.

④ Kato, J., & Maemura, N. (2017). Transmission and maintenance of cultural practice among Okinawan emigrants. *The 12th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology*, held at Masse University, Auckland, New Zealand, on August 26-28, 2017.

⑤ Maemura, N., & Kato, J. (2017). “Roots tourism” in Okinawa: how descendants of emigrants view their ancestral homeland. *The 12th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology*, held at Masse University, Auckland, New Zealand, on August 26-28, 2017.

⑥ 加藤潤三・前村奈央佳(2017). 沖縄の文化・伝統の実践における地域間・世代間比較. 日本コミュニティ心理学会第 20 回大会

⑦ 加藤潤三・前村奈央佳(2016). 『第 6 回世界のウチナーンチュ大会』にみるウチナーンチュの心理. 九州心理学会第 77 回大会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。